

近現代の沖永良部島における劇場／映画館の変遷

— 終戦直後期から昭和三〇年代を中心に —

大嶺 可代

Historical transformation in modern times of theatre on Okinoerabu Island

— from after WWII to the 1960's —

Kayo OMINE

There were many theatre all over the Okinawa Islands after 1879, but research about the theatre of Okinawa is just beginning. The Amami Islands are part of the Ryukyu Archipelago, but administratively, the group belongs to Kagoshima Prefecture, Japan. But from 1946 to 1953, the Amami Islands were officially separated from Japan, and went under direct American military control, with American documents referring to the Amami Islands as the "Northern Ryukyu Islands." During this time, there were no articles or reports written about the theatre on Okinoerabu Island. I did fieldwork on Okinoerabu Island twice (May and July, 2016), and I heard about theatre at some of places there. This is my report.

沖縄本島地域に存在した劇場や映画館についてはここ数年で研究が進み、終戦直後期から復帰前後期はもちろんのこと、戦前にあった劇場についても、資料の掘り起こしや所在地の比定作業が積極的に行われている。

しかし、1609年以前に琉球王国の支配を受け、一度薩摩藩～鹿児島県に編入されたとはいえ、終戦直後期に約8年間琉球政府下に統治されていた奄美群島、とりわけ大島⁽¹⁾を除く島々（喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島）における劇場／映画館の歴史や所在地の比定作業はこれまで全くとっていいほどなされていない。それぞれの市町村史に大衆文化・大衆芸能に関する記述

は少なく⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾、また当時の新聞（『大島新聞』『南海日日新聞』『南日本新聞』）を調べてみたが、大島以外の島々の報道は火災や遭難などに関する報道が多数を占め、文化事象に関する報道はほとんど見つけることは出来なかった。

今回、私は1968年末－69年正月に沖永良部島で行われた乙姫劇団の公演⁽⁵⁾について調査するため、二度沖永良部島を訪れた。が、肝心な公演場所である劇場／映画館の所在地比定作業そのものから行わなければならないことに気づき愕然となった。短い期間のフィールドワークではあったが、和泊町（字和泊、字手々知名）と知名町（字知名、字住吉、字田皆）で確認できた成果をここに報告したい。

沖永良部島の芸能についての先行研究

沖永良部島は琉球王国時代から沖縄本島北部地域との交流があり、沖縄芸能の影響を強く受けている。先田光演は島に薩摩藩統治下時代から伝わるグムチヲドウイ（貢物踊り）について「沖永良部島は一番貧しい島であった。大島や徳之島のように詰役（筆者注：薩摩役人）を「御慰み」できる機会と場がない島であった。したがって、詰役の要求に応じて新たに「御慰み」を作らなければならなかったであろう。そのため島役たちは鹿児島と琉球へ渡る度に、「御慰み」のための踊りを習得してきたのである⁽⁶⁾」と述べている。島の皆吉家には明治期に来島した仲毛演芸場の役者らへ支払った給金の詳細を記した文書も保存されている。⁽⁷⁾

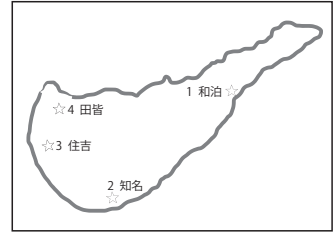
しかし、沖永良部島に存在した劇場／映画館についての記録はあまりなされていない。昭和12年に島を訪れた野間吉夫が当時字手々知名にあった「源劇場」で沖縄芝居を観たという記録（後述）、『手々知名（吾館）字誌』、源英蔵氏の自伝、そして奄美地域をとりあげた2、3の写真集くらいのものである。唯一の先行研究は、沖永良部島出身の研究者・高橋孝代による『境界性的人类学』であろう。高橋自身を含む沖永良部の住人らが鹿児島県人としてのアイデンティティを持ちながらも、沖縄音楽や芸能に「強い懐かしさ」を覚える状態について、興味深い分析・考察を行った。本書には分析作業に付随して戦前期／戦後期に来島した沖縄芝居に関する記述が散見されるものの、個々の劇団の来島時期や上演場所などについての報告はみられない。

沖永良部島における劇場／映画館の所在および歴史について

つづいて筆者によるフィールドワークで明らかになった沖永良部島の劇場／映画館について記す。

1. 和泊町

和泊町は沖永良部島の東半分を占め、主要交通要所である和泊港と伊延港、沖永良部飛行場を有する。また島唯一の博物館である歴史民俗資料館がある。



1-1. 字和泊ならびに字手々知名

字和泊ならびに字手々知名は島の玄関口である和泊港に隣接した集落であり、市役所をはじめとする公的機関のほとんどが集合している。字和泊と字手々知名境界は小高いなだらかな砂丘となっており、墓地・シマミンドー（告別式場）であった。この一帯をハニクンドー（兼久堂）、別名十五夜当と称した。古くは字手々知名の遊び踊りや貢物踊りの場であった。



1) 瑞三劇場（源劇場）と総合衣料やまくち

a. 戦前期

源英蔵氏（1923年8月14日生まれ）へ行ったインタビューによると、戦前（昭和初期）英蔵氏の祖父がハニクンドーの向かい、現在の市来酒店に瑞三劇場を建てた。別名、源劇場。もともとは料亭で、那覇の辻出身の芸妓もいたらしい。映画フィルムを上映したり、沖縄芝居をよんだりしたこともあったという。

英蔵氏はよく祖父の屋敷から映画切符の束を無断で持ち出し周囲に配っていたそうだ。「切符は）5枚続きになっているから、2枚3枚引き抜くよりその



市来酒店

まま（東で）引き抜いたほうがよい（盗みがばれない）。学校に行って「うちで映画やっているから」といってそれを配り、友人から引き換えに「サタガリ（黒砂糖をつくった釜に砂糖の残りがくっついて飴玉状になったもの）」をもらっていたよ。」また、「劇場は砂場だったので、お客さんが帰ったあとに劇場を掃除すると10銭玉などがごろごろでてきた。当時うどん10銭だったのでよく拾ったお金で食べていた」という。

1937年（昭和12年）に沖永良部島を訪れた野間吉夫は、日誌に二度、源劇場で沖縄芝居を観たと記録している。1回目は2月19日で、沖縄県人会による南洲神社鳥居寄付興業のためのいわばチャリティー興業であった。「劇場とは名ばかり、床のあるのは舞台だけで、観覧席は砂地だから凡そ愉快だ。小屋で武山哲氏に会う。女優はこの地に来ている料理屋サカナヤの女たちということであったが、はじめて見ると南国情緒纏綿たる芝居に在りし日のこの島もかくやと思ひ合せて、つよく心をひかれた。琉球古劇組踊「護佐丸敵討」は恰度、琉劇の忠臣蔵のようなものだという事であったが、（中略）十二時過ぎ、漸くはねて月明かりを幸いに海岸づたいに帰る。」⁽⁸⁾ 2回目は3月7日だが、「しかしこの芝居は女人たちだけに前のような熱も魅力も感じなかった」とのみ記録されている。

源英蔵氏の記憶と野間の日誌から、昭和前期において沖縄芝居（組踊？）を演じる劇団が沖永良部島で興行を行ったことと、料理屋のジュリらが自分たちで沖縄方言を用いた芝居（組踊？）を上演していたことがうかがえる。

b. 終戦後

英蔵氏は第二次世界大戦で徴兵され、終戦後は中国から引き上げ大島支庁に勤めたが、やがて退職し、沖縄へ映画フィルムを密輸するようになった。⁽⁹⁾その後英蔵氏は1949年（昭和24年）琉球映画貿易会社を設立するものこのこれを売却し、沖永良部島に戻った。

1950年（昭和25年）奄美映画社設立。最初は南洲橋の袂にある川原をセメントで固め、テント小屋を作って映画を掛けていた⁽¹⁰⁾。

このあと英蔵氏は2つ映画館を建てたがその詳細についてはまだ検証する必要がある⁽¹¹⁾ため、ここでは映画館の場所と英蔵氏の回想を主にとりあげる。

ひとつは和泊商店街の映画館（現在の総合衣料やまくちの2階）。英蔵氏は

店主の山口入武氏いりたけと経営に関わるのみだった。

そして瑞三劇場跡にもふたたび映画館を建てたが、『手々知名字誌』によると当時はまだ無声映画であった。また氏は各地で興業を行い、弁士も務めていたという。「観客の入場者が少なく、経営状態は苦しく（中略）上映本数は二百本を超えたと思います。現代・時代劇の中では特に記憶に残る思い出の映画は多々ありますが、その一部とは次の通り「愛染かつら」「王将」「湯の町悲歌」「この世の花」「青い山脈」「悲しき口笛」「暁の脱走」「お富さん」「忠臣蔵」「二等兵物語」「母紅梅」「みだれ髪」「真実一路」等々。」⁽¹²⁾。市来酒店の店主は「私たちが小学校のころ、戦争おわって10年くらいあとな。すごい石垣があつて階段をつくって見学場所があつた。（何をやっていたかは）はっきり覚えていない。映画をやったな—という記憶はあるが、窓口（木戸）はあつたけど幕はなかつたような気がするから、映画じゃなくて芝居だったかも。沖縄から来ていたはずですよ」と語っており、英蔵氏自身も沖縄の芝居を呼んだことがあるとインタビューで答えている。⁽¹³⁾

その後、英蔵氏は渡米したため映画館は廃業した。廃業時期等についてはまだ調査が進んでいないが、市来酒屋店の店主によると、2000年当時は更地だったとのことである。商店街の映画館については調査中である。

2) 沖映館

昭和30年代後半ごろから昭和50年ごろまで沖映館という名前の大きな映画館があつた（現在の和泊市立図書館）⁽¹⁴⁾。和泊町出身の文化人である甲東哲氏⁽¹⁵⁾によって沖縄から招かれた乙姫劇団が1969年に正月公演を打つたのはこの映画館らしい。映画館だが300名ほど収容できるため毎年地域の成人式も開催された。劇場主、映写技師については調査中である。

3) 沖えらぶシーサイドホテル

執筆時点（2016年9月）において筆者はまだインタビューを行っていないが、和泊漁港に面したホテルは元映画館で、ホテルの社長が映画館の経営者だったという地域住民からの情報がある。



沖えらぶシーサイドホテル

4) 和泊中学校体育館

和泊中学校の教員だった竹下安秀氏から、昭和40年代当時、扇ひろこや高橋元太郎、アントニオ猪木らがそれぞれショーを行ったという情報が寄せられている。

1-2. 字国頭

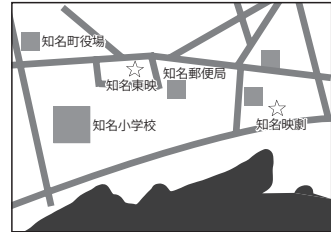
国頭集落では敬老会のため1960年頃沖縄芝居の一同を招聘したとの情報が寄せられているが、筆者は2016年9月現在まだフィールドワークを行っていないため早急に調査する必要がある。

2. 知名町

知名町は沖永良部島の西半分を占め、島の主要な港湾である知名港と、漁港の住吉港を有する。島の唯一の高校である沖永良部高校や、公共文化ホール「あしびの郷・ちな」がある。

2-1. 字知名

字知名は沖永良部島のもう一つの玄関口である知名港に面した集落で、知名市役所や知名商店街がある。



1) 知名商店街 スポーツ用品店前

昭和38年以前には知名商店街に映画館ができ頻繁に上映がなされていたようである。そのひとつは現在のセントラルスポーツ前、信用金庫の駐車場の下側にあった。経営者は宗岡新富氏。矢上島経氏らとともに知名町商工会の主要メンバーであった。⁽¹⁶⁾ 知名町商工会第3回定期総代会（1963年5月31日）、第4回定期総会（1963年6月14日）、第5回通常総会（1965年4月29日）の会場に「知名映劇」の名が確認できる。

宗岡薬局の宗岡カヨコ氏によれば、「矢上さんが靴屋雑貨屋やって、下に父が映画館大きく構えていました。屋根のある木造2階建、上は畳、すこしだけね。1階は長椅子置いていました、4-5人座れるくらいのを。沖縄の人が芝

居しに来て、寝泊りしよった。大なんとかって、流行っていた人たちだった。」⁽¹⁷⁾

宗岡カヨコ氏が触れた劇団は大宜見小太郎が率いた戦後の人気劇団・大伸座の可能性が高い。しかし、ここ沖永良部島でもすでにテレビが世間の耳目を集めていた時代で、客足は芳しくなかったとのことである。なお、この映画館で「赤胴鈴之助」を観たという情報が地域住民から寄せられている。

2) 知名郵便局向かい

もうひとつ知名には東映の映画館があった。セントラルスポーツ前の映画館と比べると少々小ぶりで一階建て、100名収容は難しい規模であった。

当時の経営者の親族である山田たかもと嵩元氏（1928年5月28日生まれ）に話を伺うことができたのでここに詳述したい。氏の兄が経営責任者で、嵩元氏も手伝っていたとのことである。当時、映画館主らで組合を作っており、和泊から源英蔵氏ともう一名、知名からは山田氏と宗岡氏（前述の知名映劇の館主）ともう一名とが寄り合って組合を作り、和泊側は日活と松竹、知名側は大映東映を上映するとりきめを行った。「映画館の椅子はいまみたいなきれいな椅子じゃないよ。手作りで作ったんだよ。長椅子を。4－5名で座るやつ。毎日映画かけていた。沖縄の芝居はきたけど、劇団名は覚えてないねー。知名でやったのは8割は踊り（琉球舞踊）よ。フィルムはね、じぶんで鹿児島行って契約した。だから赤字だったわけよ。鹿児島であちこちの映画館からあつまって「せり」みたいに値段つけて、高いところにフィルムはいくから。高かったよ、ほとんど取りきれないつまり、やくざとのやりとりになるわけさ。（むこうが値段決めて）ハンコおせ、とかさ。それで映画かけてもお客は来るとは限らないでしょ。一度契約したらむこうがフィルムは送ってくれよったよ。日にちは決まっているから送り返してね。映写機はじぶんで買った。福岡から送ってもらった。」

山田氏の話を経括すると、たしかに映画興行である程度収益はあったものの、鹿児島本土に20軒以上あった映画館と競り合い手にした人気フィルム代金（氏によると当時の金額で100万は超えたらしい）と興行収益とを秤にかけると赤字経営だった、とのことである。

この映画館について、東映の人気作品（題は不明だがチャンバラもの）を観たという声のほか、地域住民からは「歌手の高石かつ枝がここでコンサートを

開いた」という情報が寄せられた⁽¹⁸⁾。この映画館は1966年（昭和41年）1月7日に起きた知名町商店街大火災によって焼失したという。

2) 字住吉

今の住吉小学校近く、住吉自動車の隣の空き地にはいわゆる露天映画館が存在した。地域住民によると1963-4年頃のことらしい。

周辺住民の声を一部紹介すると「昔は娯楽がないからね。そのころはまだ知名と住吉はそんなに交通の便がよくないから、たしかにバスはあったけどそんなに頻繁には通らない時代。電気も（集落で）何軒かししかひいてないころ。（興行は）毎日じゃないよ、10日に1回くらい。日が沈んでからの青空映画館さ。隣の集落（注：字正名や字田皆など）からも（観客が）来よったよ。」



住吉映写場跡

住吉自動車の森富重氏（1948年生まれ）によると、この露天劇場には正式名称はなく、しいていえば「映画をする場所」であったが、映写室すらなかった。もともと窪地だった土地を埋め立て、周囲を幕で囲って発電機を置き、映写技師がフィルムをかけていたという。映写技師についての情報はいまのところ寄せられていない。

当時は住吉小学校でも児童向けに巡回映画が行われていたが、この住吉自動車隣の「映画をする場所」ではれっきとした大人向けの映画を興行していた。「子供は見にこないよ。映画見たら不良って言われていたさ。子供は夜間外出禁止令さ。僕らは学校の校庭に来た巡回映画を父兄同伴でみて、で、ここの映画は大人に黙って見にきた。この劇場には本土からフィルムが来ていたみたいだよ。山城新伍の映画「白馬童子」、里見浩太朗、東千代之介「里見八犬伝」、あとは萬屋錦之介、ひばりだった。日本映画ばかりだったな。洋物なんてなかったよ。あと舞台も組んでときおり芝居もやっていた。舞台はドラム缶に板を渡したんじゃないかな。僕が覚えているのは日本語話していたから本土から来たん

だと思う。」

森氏の話から、この露天映写場で演劇活動も行われていたことがわかる。森氏が観たのは日本語の芝居だったが、字田皆の住民からは「ここで沖繩芝居を観た」との証言も寄せられている。また、字正名在住の西直実氏によると、戦後まもなく大伸座がここにやってきて芝居を打った。先に紹介した知名映劇での興行より前、奄美復帰期（1953年）ごろと思われる。なお、この映写場は森氏が本土へ働きに出て戻ってきたとき（1966年）にはもうなくなっていたとのことである。⁽¹⁹⁾

4) 字田皆

字田皆、現在の田辺商店の向かいにも映画館があった。こちらは木造の有蓋映画館で、知名映劇館の宗岡新富氏が経営に携わったようである。

当時、字田皆でこの映画館の清掃を担当した方がご健勝で、お話を伺うことが出来たので紹介したい。新田^にノブ子氏（1933年生まれ）：

「田皆に映画館できて、わたしはその掃除しとったのよ。下の川で桶に水かめて洗濯していたら呼ぶ人がいて、ここで掃除当番探しているよというから、わたしがやるよといってやったよ。

年齢にしたら中学3年生くらいの頃の話よ。1週間に1回だったかな。みんなが映画みて終わったら昼に掃除してね。ずいぶん長い間、やめるまでやっていたよ。弁士の子がフィルムみて画面みながら弁士しとったのよ。でもわたし映画みてないのよ。掃除は映画代金の半額なのよ。映画見るためにはもう半分払わんといかんでしょ、お金がなくて働いているから映画はみていないよ。」⁽²⁰⁾

新田氏の証言通りであるならば、1948年という終戦直後期にはすでに字田皆には映画館が存在していたことになる。氏によれば、映画館はトタン屋根で、観客席には小学校で児童が座るような椅子が並べてあった。そこにスクリーンがかかっていた。100名入るかどうかという規模だったそうだ。



田皆映画館跡

前出の森富重氏は田皆映画館にも足を運んでいた。「確か石原裕次郎のデビュー作を見に行つて。ぼくは中学2年生だった。」森氏は3月生まれ。昭和22年生と同期なので1960年ごろの話らしい。「たぶんここから歩いて行つたんじゃないかな。自転車もない時代だし。そのころ映画は夜だから、親にばれて怒られた。翌日は職員室で立たされた。」

石原裕次郎主演「狂つた果実」は1956年の作品で、計算すると森氏は8-9歳。だが、東京から当時南の辺境といつてよい沖永良部島に、それも島の玄関口からかなり遠い田皆地区にフィルムがきたのが東京での封切りから4-5年後といふのは、可能性として大いにありうる話である。森氏は「小野透、花房錦一（両者とも美空ひばりの弟）たちが出ている映画もあった」とも語っており、田皆地区の住民からは美空ひばりの映画を観たとの情報もあった。

この映画館がいつなくなったのかは調査中である。当時、田皆の県道沿いには映画館の他パチンコ店もあったらしいが、火事が出て周辺はすべて焼けたとされているため、両者はほぼ同じ時期に姿を消したと思われる。また、当時の弁士を務めた方がまだご生存らしいが、今回の調査では突き止めることが出来なかった。今後の課題である。

現時点での総括

たった二回のフィールドワークで沖永良部島の劇場／映画館について総括、分析を行うのはむしろ危険であろう。取材に応じて下さった西直実氏は「終戦直後は各字ごとに映画興行が行われていた」と回答している。「当時はお金でなく飲み物のピンを木戸賃がわりに映画を観た」という体験談も、字知名在住の住民から寄せられた。

筆者は、終戦直後期から昭和30年代後半にかけて、庶民の数少ない娯楽として必要に迫られ奄美群島各地で映画館が林立し、テレビの普及によりその大部分が写真にも残ることなく消え去つたのではないかと推測している。沖永良部島のみならず他の島々においても早急にフィールドワークを行い、当時存在した劇場／映画館の歴史を明らかにすることで、当時の奄美諸島の大衆文化史を構築する手がかりとしていくことが求められる。

謝辞

和泊町歴史民俗資料館の先田光演氏、和泊町教育委員会の皆様、和泊町立図書館ならびに知名町立図書館の職員の皆様、知名町役場の前利潔氏からは文献の紹介等ご尽力いただきました。インタビューにお答えいただいた甲恵子さん、源英蔵さん、市来酒店さん、森富重さん、新田ノブ子さん、宗岡カヨコさん、山田嵩元さん、西直実さん（以上インタビュー受付順）、その他情報をご提供いただきました大勢の住民の皆様に改めて御礼申し上げます。

最後に、この論文は平成28年度科学研究費助成事業・奨励研究（課題番号：16H00005）の補助金による研究成果の一部であることを明記して終わります。

註

- (1) 奄美大島とその周辺島（加計呂麻島・与路島・請島）をここでは大島とした。なお大島での戦後文化史については間弘志『全記録 分離期・軍政下時代の奄美復帰運動、文化運動』（南方新社2003年）に詳しい。
- (2) 『喜界町誌』『徳之島町誌』『天城町誌』『伊仙町誌』『和泊町誌』『知名町誌』『与論町誌』を調査したが、戦後大衆文化に関する記述は本土復帰運動以外ほとんど見当たらない。米軍統治下において沖縄本島地域に出されたニミツ布告の禁止令が適用された例（復帰運動の歌をガリ版で刷って重労働に処せられた等）が上げられている（『徳之島町誌』217頁、『天城町誌』885頁）が、徳之島の事例なのか他地域の事例なのか記述がはっきりしない。
- (3) 演劇活動については『和泊町誌（民俗編）』923頁には字手々知名に伝わる遊び踊りについての記述中に「明治中期になって、沖縄芝居が乗り込んで、木戸銭を払って十分慰安が求められるようになり」という文がある。『知名町誌』453頁演芸・闘牛の項に「苦の中に楽を求める演芸は各字に自然的に発生した。町主催の演芸大会・学校関係の音楽コンクールが催された」とあるが、日時等についての記述は皆無。『喜界町誌』541頁には字坂嶺と字志戸桶で昭和22-23年頃当時の青年団らが中心となって演劇活動を行った様子が書かれている。先田光演氏によれば、沖永良部島にも「うるま劇団」という郷里劇団が存在したとのことである。
- (4) 映画に関しては『徳之島町誌』447頁視聴覚の項に「復帰後、34、5年までは娯楽施設や機関も少なく、レクリエーションの機会も乏しかったために巡回教育映画がどの部落でも歓迎されたものであるが興業映画やテレビの普及により関心がうすらいでいった」と記述があるのみである。なお『和泊町誌』933頁には源英蔵が起こした親子ラジオ事業についての記述があり、『伊仙町誌』304頁にも親子ラジオの項がある。皆吉平『沖永良部・島唄風土記』琉球新報社2011年 107-118頁には、皆吉本人が昭和33年正月に親子ラジオで話した島唄に関する原稿が収められている。
- (5) 『乙姫劇団興業日誌』No. 30によれば1968年12月3日（コザ自由劇場公演中）に「江良

部の甲さん（注：甲東哲氏）が中間報告に見得た」とあり、翌4日「往復の船でやって五日間休んでいくらで出来るかと費用の問い合わせでいらっしやった」、6日「昼甲さん見得て正月の江良部公演決定」、8日「(団員らの) パスポート用写真をうつす」。10日「住民票を取りに帰った、パスポートの写真出来上がった」、11日「五時頃甲さん見えて、住民票明日届ける約束をした。初さん（注：上間初枝）逢って（中略）江良部行き承だくしてくれた」。12日「初枝さん住民票取ってきた。写真出来上がり。池田法律事務所へ契約証の件でうかぶふ」、13日「甲さん見得てパスポートの手続きできた」、14日「四時頃甲さんが見得て池田さんの所で契約証を書いていただいた」。しかしこの後、沖永良部関連の記述はぷつぷり途絶えている。翌1969年1月12日以後は自由劇場公演の記述が続いており、沖永良部島で乙姫劇団がいつどこで何を演じたかについては書かれていない。

- (6) 先田光演「沖永良部島の踊り」(『鹿兒島民俗』第147号2015年) 13頁。
- (7) 「演芸団興業の給金」(皆吉平『沖永良部・島唄風土記』付録205-206頁) この文書について先田氏は、品目名にビールがあがっていることから明治30年代成立としている。(2016年5月10日筆者が行ったインタビューにて)
- (8) 野間吉夫「探訪日誌」『シマの生活史』三元社1942年 219頁。
- (9) 源英蔵『私のこれまでの生きざま』自費出版2007年 22-23頁。
- (10) 南洲橋竣工は1919年(大正8年)。周辺の川原は当時から闘牛、牛の競り市、サーカス、映画などの催し物会場だったようである(『手々知名字誌』37頁)。昭和50年前後まで「南洲橋劇場」では映画がかかっていたらしい(和泊市役所・甲恵子氏のご教示による)が、当時の経営者など詳細は不明。
- (11) 『手々知名(吾館)字誌』42頁、121頁に、ハニクンドー近辺の映画館は昭和28年にできたとあるが、この記述は「市来正三氏より買入れの家屋は、映画と有線業多忙のため貸与」(『私のこれまでの生きざま』26頁)と矛盾する。
- (12) 『私のこれまでの生きざま』24頁。どちらの映画館についての思い出かは不明。
- (13) 市来酒店フィールドワークと源英蔵氏インタビュー。両者とも2016年5月12日。
- (14) 『奄美群島日本復帰40周年 記念写真集 満天の星のごとく…』1993年 59頁には昭和42年に撮影したとされる沖映館の写真が掲載されている。
- (15) 1926年和泊町生まれ。教員生活の傍ら『名瀬市誌』『和泊町誌』の編纂に携わり、また各新聞の文化欄の執筆も行った。主著『分類 沖永良部島民俗語彙集』(南方新社2011年)。1987年逝去。
- (16) 『知名町誌』801頁。
- (17) 2016年7月6日インタビューにて。
- (18) Wikipediaによると、高石は1963年8月にコロムビアレコードから沖永良部民謡「永良部百合の花」をリリースしており、その街宣活動と思われる。参照URL: <https://ja.wikipedia.org/wiki/高石かつ枝> (2016年9月27日閲覧)
- (19) フィールドワーク、2016年7月6日。
- (20) フィールドワーク、2016年7月7日。

ラジオ受信環境と文化 一戦前の沖縄本島を事例として一

三島わかな

The situation of receiving radio broadcasts and broadcasting programs; in main island Okinawa from 1926 to 1945.

Wakana MISHIMA

This paper researches the circumstances of radio broadcasting in modern Okinawa, and focuses on main island Okinawa, from 1926 to 1945.

The first section illustrates how radio receivers had been spread out in main island Okinawa.

The second section deals about the program of Radio gymnastics, because this program was the most popular to Okinawan people. The Radio gymnastics were deeply involved to cultivate the spirit of national policy at that time.

The third section mentions that radio broadcasts were thought to be effective to learn national standard language by some cultural and educational people. And the committee of National Language in Okinawa claimed to need constructing Okinawa broadcasting station as soon as possible.

The fourth section points out that local culture were re-discovered through the radio programs broadcasted by local station.

はじめに

本稿の目的は、1925年に始まった日本放送協会によるラジオ放送が、戦前戦中の沖縄県でどのように聴取されたのかを明らかにする点にある。本稿は、これまで筆者が沖縄県内の地域別に発表した一連の論文（三島2014）（三島2015）（三島2016）の続編となる。これら拙稿はそれぞれに沖縄本島の都市部（那覇

および首里)、本島周辺離島、八重山諸島を対象とし、さらに本稿では対象地域を沖縄本島の中北部および島尻郡とする。

本稿の基礎史料は同時代新聞であり、それと並行して対象地域が刊行した自治体誌および学校記念誌も大いに活用した。自治体誌と学校記念誌については後世が作成したという意味で二次的資料であるが、県内の人々がラジオ放送をどのように聴取したのかといった、何気ない日常を描き出すうえで自治体誌と学校記念誌に収録される回想録はきわめて有効である。

本稿の方法論として、砂金からわずかながらの金を洗いだすような地道な作業——実証的研究——を行う背景には、沖縄の戦後の研究史に対していささかの疑問を感じるからである。沖縄のラジオ放送に関する研究領域には一定の蓄積がある。けれども、それらの対象年代は戦後となっている(辻村1966)(宮城1994)(川平1997)。なぜなら先行研究の多くが米占領地政策の観点にもとづくため、戦後のラジオ放送をもって沖縄での放送事業の嚆矢としてきたことによる。つまり、これらの先行研究では沖縄の今日的状況が戦後に始まるものという前提で論が展開されてきたことに、筆者は疑問を感じるのである。さらに言えば、戦前・戦中の県内での聴取の様子や、放送文化が県民に何をもたらしたのかについて、これらの先行研究は無関心だった。

つぎに、沖縄の音楽文化に関する研究領域(とくに洋楽受容や伝統文化の継承・創造面)にも成果があるものの(三島 2014)、二〇世紀に誕生したラジオというメディアによる放送文化が、何をどのように発信してきたのかについては、近年になってようやく関心もたれてきた。この領域は二十一世紀を迎えて萌芽した今日的な課題である。

1. 受信器の設置と普及

ここでは、受信器の設置と普及について見ていきたい。まず、公的な場や施設にラジオ受信器が設置された機会に注目したい。それはいくつか挙げられるが、より典型的な機会は学校の創立記念事業であり【稿末表31】、また1940年の国家的イベント・皇紀二千六百年記念事業も受信器の設置をうながす機会となった【稿末17, 18】。そのことを伝えるものとして、中頭郡天願小学校の様子を以下に紹介する【稿末表17】。

中頭天願小学校では皇紀二千六百年記念事業として、校歌の制定、校旗の樹立及びラヂオ設置をなし、いよいよ来る十一日紀元の佳節当日式典後、校歌制定と校旗樹立式を執行するが、これと共に奉祝行事として十日から十二日まで三日間、同校で副業品評会を開催、更に県衛生課に依頼して衛生展覧会と映写会を開催、学区民の衛生思想の普及、体位向上に拍車をかけることになった。

1940年11月10日に行われた紀元（皇紀）二千六百年記念式典は東京の皇居前（宮城前）広場で執り行われ、その模様は植民地を含めた日本の津々浦々で放送された（ルオフ 2010 : 36）。翌日以降の数日間にわたる関連祝賀番組では国内各地の放送局をネットワークで結んで中継された。沖縄県民もラジオを聴取することで、県内に居ながらにして東京で行われた式典の臨場感を味わうことができただろう。つまりラジオというメディアは式典やそれを喜ぶ各地の人々の模様を中継することによって、遠く離れた場所にいる津々浦々の国民を一体化させ、共時的な仮想空間を創出したのである。

ちなみに1937年に実施された沖縄県内におけるラジオ設置校調査によると、県内の中等学校20校のうちラジオ受信器を設置しているのは7校、小学校は25校だったという【稿末表15】。さらに校内での設置場所については、前出の天願小学校では職員室と証言されており【稿末表18】、中城村の小学校では宿直室に設置されていたという【稿末表23】。

さらにここでは小学校のような公的施設ではないが、ラジオ倶楽部の存在についても多少触れておきたい。1921年に首里市助役に就任した比嘉盛章の那覇市内にある自宅がラジオ倶楽部として指定されたという。そのことを伝える記事を以下に紹介する【稿末表14】。

近く名那覇市内に出きるラヂオ倶楽部のラヂオセットは、一昨日の台北丸で到着し、倶楽部に当てられる比嘉盛章氏宅に据え付けられたが、倶楽部の入会申込者は意外に多数にて、中には第二中学の志喜屋孝信氏も見へるが、設立の上は二中学生を家族としてラヂオを聴かせることになっている。猶、現在市内でラヂオを据え付けているところは西新町の

古田、石門通の青山、久米町の今井の諸氏と今度のラヂオ倶楽部等である。

この記事からわかることは、ラヂオ倶楽部が沖縄県立第二中学校の生徒やその家族のための聴取の場であり、引用中の志喜屋孝信も当時沖縄県立第二中学校校長だった。第二中学校関係者のラヂオ聴取の場として、比嘉助役の個人宅が提供されたことになる。ただし県内でのラヂオ倶楽部に相当する場は比嘉宅が唯一のものではなく各地にあったと考えられる。現在筆者が確認している場所としては八重山諸島の西表島である。西表島の場合には「読書倶楽部」と呼ばれ、字の青年団の集会所にラヂオ受信器が設置されていた¹（三島2015：20-21）。

つぎに、公的な場の受信器がどのように購入されたのかに注目したい。現存する史料で最も多く確認されるケースは、海外にいる出稼ぎ者からの寄附である。その事例として金武小学校の記録を紹介する【稿末表13】。

ラヂオの普及が地方文化の開発に貢献する所は多大のものであるが、今回金武小学校ではスーパートロダイン六球受信機を備え付けて、児童及び一般村民に利用せしめることになった。而してその費用は海外に出稼
フィリッピン
の比律賓県人会長伊芸新助氏外十二名の寄附によるものであると…。

金武小学校の他、本島周辺離島にある座間味国民学校などでも、台湾に移り住んだ人々や南洋へ出稼ぎに出た人々から郷里の母校へと受信器の購入費が寄附されたことが確認されている（三島2016：19-21）。つまり出稼ぎで得た経済力と彼らの成功の証としてラヂオ受信器が寄贈され、それは異郷で生活する人々の郷里愛そして母校愛を象徴するものとなっていた。

メディア史研究家の山口誠は、日本の放送の1930年代に対して「放送協会が聴取者の増加に本腰を入れていく時期である」としながらも「より正確には“聴取者の増加”というよりも“聴取者”そのものの創出というべきだろう」と指

摘する（吉見 2002：226）。本稿では山口の指摘を踏まえながら、沖縄本島で受信器の設置を促進させた具体的な要因について考えたい。そこには二つの要因があったと考えられる。時系列にみると、その一つが1939年のことである。ラジオの申込受付業務を各郵便局が窓口として対応することとなり、聴取設置許可料がそれまでの一円から五〇銭に減額された。しかも放送協会が負担することになったため、聴取者は実質的には許可料全免となった【稿末表28】。このように利用者の経済的な負担軽減がはかられたことは、受信器の普及を加速させたと考えられる。二つめの要因は、1942年に「ラジオ商業組合」²が結成されたことと考えられ、全県にある30余の店舗が加盟した。組合が成立したことによって、従来はバラバラだった受信器の修繕料が定額に統一された。その点で新たな聴取者を獲得することに繋がったろうと考えられる。組合成立以降、沖縄県内の聴取者の数は鰻のぼりになったという【稿末表14】。

2. 国策の実現をめざして——ラジオ体操の普及

メディア史研究家の竹山昭子は、ラジオ体操が日本社会に定着した要因について「体力の増進によって健康な体を作ることから、集団的運動、全国的統一という精神主義的なものが強調され、挙国一致という国家目標へと収斂されていった」（竹山2002：264）と分析する。そして「日本人の意識のなかに日常の儀礼というニュアンスを帯びながら定着していったのではないか」（竹山2002：264）と考察する。

日本でのラジオ体操は簡易保険局、文部省、生命保険会社協会および日本放送協会の四者協議のもとで1928年に実現した。ラジオ番組としての放送開始は1928年11月1日である。以来ラジオ体操は簡易保険局による多角的な普及活動のもとで、日本放送協会による放送網の拡大や受信器の一般普及を背景として全国で実施された。沖縄県内での導入も他府県と足並みを揃えるものであったと考えられる（三島2016：21）。

1930年代以降の沖縄県内の様子を伝える史料にもラジオ体操に関する記録は数多く確認され³、そこでは本島各地でラジオ体操がどのように実施されたかを知らせるだけでなく、その実践を通じて人々がどういった習慣や意識を身につけ、その先に何を期待していたのかを読みとることができる。ここでは前述

した竹山の分析を念頭におきつつ、沖縄本島の状況について次の三点を指摘したい。

その一つが、小学生を対象とした「早起き」や「心身の鍛錬」を習慣化するうえでラジオ体操の導入が有効だった点である【稿末表1, 2, 6, 16, 30】。当時の小学校では朝礼や運動会でラジオ体操が定番であり、朝礼の場ではラジオ体操だけでなく朝読み会（朝の朗読）もセットで行なわれていた【稿末表1, 2, 6】。また地域の子供たちが所属した生徒会⁴でもラジオ体操が行われていたことがわかる。毎週日曜日ならびに夏休みや冬休みなどの長期休暇になると生徒会の子供らは夜明け前に^{ムラヤー}村屋に集合し、まず集落内を練り歩いたあと、「^{ムラヤー}村屋にあった桜の木の下で、字担任の指揮で天突き運動、ラジオ体操を行ない体と心を鍛えた」【稿末表30】という。

二つめは、各地の青年団の取り組みでも早起きは奨励され、「早起増産」の一環としてラジオ体操が行なわれた点である。そこでは、ラジオ体操終了後の時間が「勤労奉仕」や「共同作業」に充てられた【稿末表3, 5】。その事例として、国頭郡久志村嘉陽の青年団の様子を以下に紹介したい【稿末表5】。

青年団の修練場前広場で体操会が誕生、国民体操、ラジオ体操、青年体操を行ない、それが済むと共同耕作地の手入りに、軍人家族の奉仕作業を続けているが、これも七年の歴史を有し、“我が部落では青年団のおかげで労働不足の声を耳にしたことがない”。

三つめは、ラジオ体操を実施することを通じて地域の人々の「体位向上」および「地域振興」が期待されていた点である【稿末表8, 12】。その事例として名護町の様子を紹介したい【稿末表8】。

国頭郡名護町郵便局通では、このほど暁のラヂオ体操を実施した。この通は名護署から特に体位向上、衛生指導部落として指定されたもので、名護署を初め商店、理髪屋、写真館などが軒を並べており、毎朝午前五時太鼓の音とともに各戸の人々が一斉に起床、老人も子供も勢揃いして暁の街頭に掛声勇ましくラヂオ体操を展開する。その他、三ヶ月に一回

づつ町内開業医が各戸の無料健康診断を行うほか、栄養料理講習会の開催、衛生問題研究会の開催等、体位向上の国策線に沿う模範部落を築いている。

1940年12月、本部町渡久地の常会では朝のラジオ体操の実施が町制施行日を記念して決議された。その様子が次のように記されている【稿末表12】。

先ず午前六時、渡久地警察署のサイレンを合図に署大広場に町民集合、老いも幼きも皆馳せ参じて、宮城遥拝、黙祷の後、蓄音器⁵に合せて勇ましく、オー、二とラジオ体操を行っている。町制施かれてからの町民のその元気溼刺たる姿は振興気分みなぎりたのもしきかぎりである。

ここではさらに、戦時下のラジオ体操が地域の祭りの中でどのように位置づけられ、そして祭りの演目がどのように再編されたのかを見ておきたい。その顕著な事例として、1943年翼賛会国頭支部の次の記事を紹介する【稿末表4】。

昔から伝わった郷土の芸能精神は概ね祭祀と結びついていた。しかるにいつしかこれと遊離し、村芝居、村踊りの如く娯楽本位となり、観衆に媚びる不面目な遊興気分が漂い勝ちとなった。しかし、今日の農村娯楽は新しい祭典の上に厳かに建設さるべきであり、年に一度の鎮守の祭または御宮祭を、娯楽本位の名称村芝居或は村踊りを廃して、今後は巴祭りと称える。

当時の村芝居や村踊りが「観衆に媚びる不面目な遊興気分が漂い勝ち」なことを批判し、農村娯楽は「新しい祭典の上に厳かに建設さるべき」という考えから、「巴祭り」と改称することになったことがわかる。単に「巴祭り」への改称にとどまらず、演目構成にも手が加えられていた。そこでは新たに、「体育的なもの」「舞踊」「音楽」「劇」「特殊な娯楽」といった五つのカテゴリーで構成されていた。

【巴祭りの演目構成】

「体育的なもの」棒踊、体操、綱引、空手、相撲

「舞踊」剣舞、琉球舞踊、音頭

「音楽」国民愛唱歌、詩吟、琉球音楽、長唄、琵琶歌、謡曲、浪花節、小唄

「劇」標準語劇、古典劇、紙芝居、無踊劇

「特殊な娯楽」ラジオ体操、蓄音機、映画

それぞれのカテゴリーは沖縄ならびに日本本土の伝統的な芸能ジャンルを軸としながらも、国民愛唱歌や標準語劇のような近代以降にできた新しいジャンルもあった。ここで注目したいのは「特殊な娯楽」であり、そこにはラジオ体操が組み込まれている点である。なお「特殊な娯楽」のカテゴリーにはラジオ体操の他に蓄音機や映画が含まれているので、「メディアによる娯楽」と言い換えることができる。

3. 沖縄だからこそ放送を利活用——標準語教育・社会教育の手段

他府県との言葉の差異が大きかった沖縄県において、標準語教育の手段という観点からもラジオ放送への期待は大きかった。その期待感が読みとれる記事を、以下にいくつか紹介する。

まず、本島北部にある国頭尋常高等小学校の記事である。そこには山奥の僻地だからこそ、ラジオ放送を学校教育に活用することの利便性が意識されていることが読みとれる【稿末表10】。

国頭郡国頭尋常高等小学校は、那覇市を去る三十里の沖縄本島最北端の学校だが、今回御大典事業として五球式のラヂオを新設して児童教育に新鮮味を注入することとなり、目下、東京、大阪その他の放送を聴取せしめつつあるが、僻遠な山原の奥でいながらラヂオをきくことが出来るので、児童教育上甚だ時宜に適したことである。なほ県下小学校でラヂオを設置したのは同校をもつて嚆矢とする。

つぎの記事は沖縄国語研究会⁶に関するものである。この会の目的は国文学

および国語教育の調査研究を行ない、本県国語教育の振興と向上をめざすものだった。ここでも児童に標準語を修得させるうえで、放送の有効性が強く意識されていた。1936年当時、沖縄県内での放送電波の受信は熊本中央放送局経由で行なわれており、そういった状況を鑑みた国語研究会は県内にも早急にラジオ放送局を設置することを要請した。ちなみにその要請から数年後、柳宗悦らの日本民芸協会と沖縄県学務部との間で標準語励行運動をめぐる論争が繰り広げられることとなる。そういった事件以前の県内の動きとして、沖縄国語研究会の記事を紹介する【稿末表11, 24】。

国語研究会が放送局を要望。言葉を異にする沖縄県では標準語普及の方法が永年識者間に考究され、殊に教育会では標準語の徹底に全力を注ぎ「沖縄の教育振興は国語教育から」と叫ばれているが、県下中小学校国語研究会ではラヂオ放送局の設置により国語統一問題の解決に資すこととなり、那覇放送局設置促進に関する陳情書を通信省中央放送局に送ることとなった。

1937年、首里第二尋常高等小学校は創立五十周年を迎え、記念事業の数々が執り行われた。その一環で学校設備の補充もなされ、ラジオ受信器の新設費用として十万円が計上された。前出の国頭尋常高等小学校の事例と同様に、内地から遠く離れた沖縄県だからこそ、ラジオ放送を活用した教育が必要だという見解が示されている点に注目したい【稿末表31】。

五十周年記念事業の計画の中にラヂオ購入がおりこまれていた。案外早く実現されて職員児童共に喜びあった。児童教育上是非供へねばならぬものだと痛感していたが、五十周年を機会にここに凱歌があがった。本県の如く地理的に恵まれぬところでは、ラヂオを通しての教育が如何に必要であるか。十四、五年前迄はラヂオは極めて幼稚のものであった。それすら物珍しいものと考えた時代もあったが、これに比較し、僅かの年数で、しかも今日の如き発達をしたのは近代科学の偉力に今更ながら驚く。人間が自然を征服する時代が今に来るだろう。ラヂオを通し日常生活

活に必須な知識を修得せしめ、文化の伝達拡充に今一度の光彩をはなつ機会をとともに喜ぶ。

この記事では、ラジオ放送の意義や社会的効果を標準語教育だけに限定せず、より広範にとらえており、「日常生活に必須な知識の修得」や「文化の伝達拡充」の面にも期待を寄せている。日本経済思想史研究の坂本慎一は、実業家の松下幸之助を分析し、松下に対して「戦前のラジオ放送を熱心に聞いて勉強したのではないか」と述べる（坂本2011:19）。そういう意味で沖縄本島の人々にとっても、情報源としてのラジオ放送が果たした役割は現代のわれわれが考える以上のものであっただろう。

4. 郷土の再発見——沖縄放送局制作の番組

本稿では最後に、コンテンツについて見ておきたい。1930年代後半の沖縄では「那覇音楽団」が誕生した。この楽団は那覇在住の音楽愛好家が集まって結成されたものであり、その主要メンバーは沖縄県立第二高等女学校の音楽教師や天妃小学校の訓導の他、常設映画館の元楽師たちだった⁷。戦前の沖縄には映画館が二つしかなく、サイレント映画時代に映画館の楽隊部で楽師を務めた人々は、他府県と同様にトーキー時代の到来によって職を失った。その後、彼らは「ラジオの放送局に呼ばれ、そこで楽団の演奏を録音し、そして流されたこともあったが、雑音が多くて聞き難いところが多かった」と回想されている【稿末表9】。そして当時のラジオ放送で流された音楽としては、「軍歌などが主体ではあったが、琉球民謡の場合は大もてだった」【稿末表9】と言う。

ローカル放送局としての沖縄放送局は太平洋戦争勃発直後の1942年初めに開局した。米軍の空襲によって1945年3月に沖縄放送局が壊滅されるまでの三年余りにわたって、地元局が制作した番組も本県内で放送された。開局当初の番組内容の詳細が記録に残されているので、以下に引用する【稿末表26】。

待望久しかった沖縄放送局は十九日開局、県民のよろこびを乗せた楽しい四月末までのローカルプロがつぎの通りきまった。同局ではローカル放送に万全を期して県内各方面の代表を網羅した放送資料研究委員会を

組織、委員長に早川知事を推してその第一回委員会が十四日午後二時より県正庁で開かれ、まづ三月二十日より四月三十日までの放送番組が決定したのであるが、当日特に各委員から要望された意見は本県においては、まづラジオの普及が何よりの問題であるから積極的に働きかける、ラジオ普及協議会の設置、県政振興に協力するため県当局の県政発表の時間設置、必勝下に相応しい郷土自慢や郷土殊勲勇士の紹介、毎月月末に来月の新生活運動の目標と具体的解説、ローカル演芸放送はあまりそれに偏しないこと。などで、更に講演放送は知名士だけを揃へず澁刺たる若い青年層も大いに活用されたいと強調された。

このように、戦時下だからこそ必勝祈願のために郷土の勇士を鼓舞し、郷土自慢のような番組が意識的に制作された。引用中には「ローカル演芸放送はあまりそれに偏しないこと」とあるが、実際には、次にあげる琉球古典音楽や沖縄民謡、古典劇に題材をとった放送劇なども放送されていた【稿末表26】。

四月の単独放送番組・・・(中略)・・・【音楽、演芸】(午後のニュースにひきつづき二〇分乃至二五分間)詩吟、合唱、ラッパ鼓隊中学校生徒、△吹奏楽女学校生徒、△勤労者の音楽、△箏曲、△郷土古典音楽、△離島民謡めぐり、△放送劇“護佐丸”石川文一作、△愛国詩または短歌朗誦沖縄歌人協会 【講演または音楽】(後六時五〇分より六時五九分)・・・(以下省略)・・・

まとめ

ラジオ受信器の設置の機会と普及の背景については、次の諸点を確認した。那覇市内ではラジオ放送開始当初からラジオ倶楽部が設置され、その後の年代を通じて、ラジオ倶楽部は県内各地に点在したと考えられる。公的な場での設置については小中学校で多く確認された。学校での設置の機会については、一つには学校創立記念事業にちなんでおり、その背景には1930年代から40年にかけて創立五十年を迎える学校が多かったことを補足しておきたい。さらなる設置の機会には紀元二千六百年記念事業にあり、その一環として1940年には、各地

の小中学校が受信器を設置する流れにあった。ことに学校での受信器の設置は、海外にいる出稼ぎ者からの寄附によって実現されるケースが多かった。その意味でラジオ受信器は、郷里を離れた卒業生による母校愛そして郷土愛のシンボルと言える。受信器の設置をうながした具体的要因としては、1939年に聴取設置許可料の全免がはかられたこと、さらに1942年にはラジオ商業組合が県内で結成され、受信器の修繕料が定額に統一されたことを確認した。利用者の経済的負担の軽減が、ラジオ聴取者層の拡大へとつながった。

国内でのラジオ体操の導入は、簡易保険局や生命保険会社協会を主軸として進められ、一義的には国民の「心身の鍛錬」にあった。その後の普及の段階をとおして、とくに1940年代の戦時下になると「早起増産」「体位向上」「地域振興」などの国策に対応したモットーと一体化し、ラジオ体操は、その実現をうながす手段のひとつとなった。あわせて戦時下のラジオ体操は、大政翼賛会の指導のもとで村落共同体による「巴祭り」の演目にも組み込まれることにより、地域の伝統芸能と同じ場で享受された一時期もあった。

1930年代の沖縄本島内では、1. 標準語の修得、2. 幅広い知識の修得、3. 文化の伝達拡充の手段として、ラジオ放送の有用性が一般認識となりつつあった。他府県と比較した際に、沖縄県の特殊性は大きく見て二つある。その一つが、言語面における本県特有の課題である。つまり標準語を修得するうえで、音声メディアであるラジオ放送の特色は、居ながらにして、いつでも標準語の響きに馴染むことができる点にあった。その意味で、沖縄国語研究会がラジオ放送に寄せた期待は大きかった。二つめ特殊性は本県が本州から遠く離れているために、情報入手が遅れがちだった点にあった。けれどもラジオ放送というテクノロジーを県内各地で広く享受することによって、本県の地理的デメリットにも大幅な改善がはかられることが期待されていた。

沖縄放送局制作の番組については、1940年代の戦時下という国民の精神的な結束を重視した社会状況が、いまいちど郷土文化の再認識をうながした点を確認した。郷土の人々の連帯意識を高めるには、それぞれの郷土のもつ文化の力をもってこそ成し得るからである。だからこそ1942年に新設された沖縄放送局は、以来、郷土文化を主軸に据えた番組づくりを積極的にはかったのである。

以上を総括すると、ラジオ受信器の普及やラジオ体操の普及ならびにラジオ

番組をつうじて郷土文化の再認識をはかるといった、これらの大きなうねりの形成を考えるうえで、戦時下という時代性抜きに語ることはできない。

出典

- 上勢頭誌編集委員会（編）『上勢頭誌』1997。
- 嘉手納町史編纂審議会（編）『嘉手納町史』資料編4 1998。
- 兼城字誌編集委員会（編）『兼城誌』2006。
- 川平朝申『終戦後の沖縄文化行政史』月刊沖縄社 1997。
- 宜野湾市史編集委員会（編）『宜野湾市史』第6巻 資料編5 新聞集成2（戦前期）1987。
- 金武区誌編集室（編）『金武区誌』1989。
- 具志川市史編さん委員会（編）『具志川市史 新聞集成 大正・昭和戦前編』1993。
- 坂本慎一『戦前のラジオ放送と松下幸之助 一宗教系ラジオ知識人と日本の実業思想を繋ぐもの』PHP研究所 2011。
- 佐敷小学校創立百二十周年記念事業期成会 記念誌編集委員会（編）『佐敷小学校創立百二十周年記念誌・やればできる』2003。
- 島袋源一郎（編）『沖縄教育』沖縄県教育会 第205号 1933年9月：69-70。[船橋治『復刻版 沖縄教育』第24巻 不二出版 2011]
- 首里第二尋常高等小学校（編）『首里第二尋常高等小学校 創立五十周年記念誌』1937。
- 竹山昭子『ラジオの時代 一ラジオは茶の間の主役だった一』世界思想社 2002。
- 知念尋常高等小学校（編）『創立五十周年記念誌』1934。
- 北谷町史編集委員会（編）『北谷町史』1985。
- 辻村明・大田昌秀『沖縄の言論 一新聞と放送』南方同胞研究会1966。
- 中城村史編集委員会（編）『中城村史 通史編』1994。
- 名護市史編さん委員会（編）『名護市史 資料編3』1985。
- 那覇市企画部市史編集室（編）『那覇市史』資料篇第3巻7 市民の戦時・戦後体験記1（戦時篇）1981。
- 並里区誌編纂室（編）『並里区誌 資料編戦前新聞集成』1995。
- 西原町史編纂委員会（編）『西原町史 西原の文献資料』資料編 第2巻 1984。
- 三島わかな『近代沖縄の洋楽受容 一伝統・創作・アイデンティティ』森話社 2014。
- 三島わかな「戦前期沖縄でのラジオ放送 一受信・聴取・発信をめぐって一」『沖縄県立芸術大学紀要』第22号2014：1-17。
- 三島わかな「近代八重山におけるラジオ放送の受信をめぐって 一個人の邸宅から公衆の場へ」『ムーサ』第16号2015：15-25。
- 三島わかな「近代沖縄でのラジオ放送の聴取 一本島周辺離島を対象に」『沖縄県立芸術大学紀要』第24号2016：15-28。
- 宮城悦二郎『沖縄・戦後放送史』ひるぎ社 1994。
- 本部小学校百周年記念誌編集部（編）『本部小学校100年誌』1982。
- 本部町史編集委員会（編）『本部町史 大正～昭和戦前・戦中期の本部』資料編3 新聞集成 2001。

吉見俊哉（編）『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社 2002。

ルオフ、ケネス『紀元二千六百年ー消費と観光のナショナルリズムー』木村剛久（訳）朝日新聞出版 2010。（Kenneth J. Ruoff, *IMPERIAL JAPAN AT ITS ZENITH: The Wartime Celebration of the Empire's 2,600th Anniversary.*）

註

1. 西表島の読書倶楽部には毎晩、青年男女及び字民がラジオを聞きに集まった。その維持は青年団が行ない、管理経費は学校、青年団、在勤員によるものだった（三島2015：20-21）。
2. 他府県では1930年代に設置されていたが、沖縄県では1942年設置だった。つまりラジオ商業組合の設置は、沖縄放送局開局のタイミングと連動したものだったと考えられる。
3. 【稿末表1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 12, 16, 30】はラジオ体操の実施を伝える記事である。
4. 戦後の「子供会」と同様の組織と推察される。
5. この事例からわかるように、ラジオ放送の時刻に合わせることができない場合には、レコードを使用してラジオ体操を行っていたようだ。
6. 正式名称は「沖縄国語研究会」。1933年8月に発足し、会長は大城元長、副会長には世禮國男が就任した。発足の時点で百名を超える会員がいた（島袋1933年9月：69-70）。同会は1936年1月、折口信夫を招聘して「万葉講習会」を主催した。
7. 「楽団作りに奔走されたのは、当時、県立第二高等女学校の音楽の先生をされていた備瀬知範、天妃小学校の訓導であった外間永律、大城ツル（元琉大教授）、本部茂、国場世保、それから新垣絃二郎、島袋次郎、安里、我謝の諸氏であった」【稿末表9】。

【稿末表】ラジオ受信に関する記事（対象地域：沖縄本島）

W.C.	みだし	記載内容	記事年代	出典・書名	出版年
1	昭和初期における学校生活のあらまし行事を通して見た学校生活	朝会（朝礼と言わず朝会といていた）は校長先生その他看護番の先生から訓話を聞き、ラジオ体操をした。各学級から代表が出て、朝礼台の上で、国語読本の朗読をした時期もあり。朝会後の各教室への行進を、行進ラッパ（信号ラッパ）に歩調を合わせた時期もあった。	昭和初期 (昭和7年前後)	本部小学校 100年誌	1982
2	祝賀運動会プログラム	15 ラジオ体操 三以上男女	昭和9年頃	創立五十周年 記念誌	1934
3	われらの健民運動は稲刈未明に共同作業の青年団	全国的に展開されている夏季心身鍛錬運動で県下各地に未明のラジオの掛声が勇ましいが、“われらの健民運動は稲刈だ”と羽地村字仲尾次部落の青年団では毎朝未明の稲刈共同作業を続けている。	昭和18年8月1日	名護市史 資料編3	1985
4	村芝居に代る巴祭りを創案翼賛会国頭支部にて	今日の農村娯楽は新しい祭典意識の上に厳かに建設さるべきであり、年に一度の鎮守の森の祭または御宮祭を、娯楽本位の名称村芝居或は村踊りを廃して今後は巴祭りと呼べる。更に翼賛では巴祭りの指導方針も確立、即ち・・・◆慰安の種類【体育的なもの】棒踊、体操、綱引、空手、相撲、【舞踊】剣舞、琉球舞踊（不健全なもの廃止）、音頭その他、【音楽】国民愛唱歌、詩吟、琉球音楽、長唄、琵琶歌、謡曲、浪花節、小唄その他、【劇】標準語劇、古典劇、紙芝居、無(ママ)踊劇、【特殊な娯楽】ラジオ体操、蓄音機、映画	昭和18年9月8日	名護市史 資料編3	1985
5	“早起増産”の二十年/“労力不足を知らぬ部落”の青年団	国頭郡久志村嘉陽部落青年団の伝統を誇る敢闘篇。【体練】支那事変勃発の昭和十二年、青年団の申し合わせにより“先づ御国へ御奉公するには我々がより良き体の持主になる事だ”と、早起運動と共に青年団の修練場前広場で体操会が誕生、国民体操、ラジオ体操、青年体操を行なひ、それが済むと共同耕作地の手入れに、軍人家族の奉仕作業を続けているが、これも七年の歴史を有し、“我が部落では青年団のおかげで労働不足の声を耳にしたことがない”とは部落民のいつわらざる告白。このほど青年団汗の結晶で得た金で銃剣道具を揃へ、滅敵精神を昂揚している。	昭和19年1月14日	名護市史 資料編3	1985
6	師魂凜々/壮年訓導の手記整備兵	(一) 少年錬成【朝の生活実践】まだ夜は明けぬだらうに児童たちの呼びかふ声がある。飛び起きて行くと、なるほどきびの花がほのぼのと白くしつとりと、のどかな美しい夜明けである。あ	昭和19年1月28日	名護市史 資料編3	1985

		<p>ちらの道はあの班が、こちらの道はこの班がさっさと掃いて行く。豊かな実りの朝、ラジオ体操も活発に、頭上を飛ぶ飛行機、脱殻機のひびきも勇ましく、やがて朝靄の煙の中から朝読みの声がする。「敵として東海にあり、日の出づる国にしあれば、日の本とほめたたへたり」教科と生活の遅しいつながり、脱殻機も、飛行機も、みな一つみ一つへの進軍だ。</p>			
7	郷土放送/決戦下の琉歌	<p>日婦県支部へこのほど名護町支部副会長大城静さんから“決戦下における日本婦人の心構へを詠む”と題して琉歌が送られて来た。二、三つ紹介すると、“国の生死の 此の際ゆでもの 女子の身ゆやてん 命限り”“忍ばらぬ忍び 忍で此の際や 唯国の御為 尽す行かな”“互に肝合わす 戦捷願て わした日の本の 光拝ま”</p>	昭和19年3月8日	名護市史資料編3	1985
8	街頭のラヂオ体操	<p>日頭郡名護町郵便局通ではこのほどのラヂオ体操を実施した。この通は名護署から特に体位向上、衛生指導部落として指定されたもので、名護署を初め商店、理髪屋、写真館などが軒を並べてをり、毎朝午前五時太鼓の音とともに各戸の人々が一斉に起床、老人も子供も勢揃ひして暁の街頭に掛声勇ましくラヂオ体操を展開する。その他三ヶ月に一回づつ町内開業医が各戸の無料健康診断を行ふほか、栄養料理講習会の開催、衛生問題研究会の開催等、体位向上の国策線に沿ふ模範部落を築いている。</p>	昭和15年5月25日	名護市史資料編3	1985
9	戦時中に生れた那覇音楽団	<p>昭和11年、12年ごろ、那覇で音楽の好きな人たちが集まり、ささやかな楽団を作ろうではないか、と話し合われ、その楽団作りに奔走されたのは、当時、県立第二高等女学校の音楽の先生をされていた備瀬知範、天妃小学校の訓導であった外間永律、大城ツル（元琉大教授）、本部茂、国場世保、それから新垣絃二郎、島袋次郎、安里、我謝の諸氏であった。新垣、島袋、安里、我謝の四氏は、戦前、沖縄に二つしかなかった映画常設館であった平和館と旭館の無声映画時代華やかなりしこをの楽隊部の「楽士」さんであった。・・・しばらくしてラジオの放送局に呼ばれ、そこで楽団の演奏を録音し、そして流されたこともあったが、雑音が多くて聞き難いところが多かったようだ。このことも初めてのことであったので県下の話題となった。・・・とにかく初の演奏会、ラジオ放送では、軍歌などが主体ではあったが、琉球民謡の場合は大もてだった。ラジオ放送後間もなく、那</p>	昭和11年～昭和18年頃	那覇市史資料篇第3巻7市民の戦時・戦後体験記1（戦時篇）	1981

		<p>那覇尋常高等小学校の校庭で、海軍の楽隊の演奏が二度ほどあった。校庭のほぼ中央部にあったセンダンの大木の下に舞台が作られ、その上に隊員がずらりと並び、それを取りまくように大勢の聴衆が集まっていた。そこへ、那覇音楽団員の歌手も出る、というので、私も二度出場し、彼らの演奏で「建設の歌」を一曲うたったことを覚えている。そういうことで、那覇音楽団の名声聞き、各地方からの演奏依頼が続々ときた。</p>			
10	ラジオで児童教育/沖縄小学校に	<p>国頭郡国頭尋常高等小学校は、那覇市を去る三十里の沖縄本島最北端の学校だが、今回御大典事業として五球式のラジオを新設して児童教育に新鮮味を注入することとなり、目下、東京、大阪その他の放送を聴取せしめつつあるが、僻遠な山原の奥でいながらラジオをきくことが出来るので、児童教育上甚だ時宜に適したことである。なほ県下小学校でラジオを設置したのは同校をもつて嚆矢とする。</p>	昭和4年5月12日	並里区誌資料編戦前新聞集成	1995
11	母の子守唄から標準語を仕込む/難解の沖縄語禁止運動/国語研究会で対策	<p>・・・討議の結果標準語は先ず母の子守唄、母のお伽噺からはじめねばならず、さらに奨励方法としては左の点数があげられた。 ▼ラジオ放送局設置</p>	昭和11年7月30日	本部町史 大正～昭和戦前・戦中期の本部資料編3新聞集成	2001
12	町民が暁のラジオ体操/町制施行の佳き日から実行/澁刺たる本部町	<p>本部町渡久地では常会で決議した朝のラジオ体操を去る十日の町制施行の日より実行、先ず午前六時、渡久地警察署のサイレンを合図に署大広場に町民集合老いも幼きも皆馳せさんじて、宮城遥拝、黙禱の後、蓄音器に合せて勇ましく、オー、二とラジオ体操を行っている町制施かれてからの町民のその元気澁刺たる姿は振興気分みなぎりたのもしきかぎりである。</p>	昭和15年12月15日	本部町史 大正～昭和戦前・戦中期の本部資料編3新聞集成	2001
13	出稼人の寄附でラジオ設置 金武小学校	<p>ラジオの普及が地方文化の開発に貢献する所は多大のものであるが、今回金武小学校ではスーパートロダイン六球受信機を備え付けて、児童及び一般村民に利用せしめることになった。而してその費用は海外に出稼の比律賓県人会長伊芸新助氏外十二名の寄附によるものであると…。</p>	昭和4年8月25日	金武区誌	1989
14	ラジオ倶楽部一昨晚からセット据付け 会員には二中生	<p>近く名那覇市内に出きるラジオ倶楽部のラジオセットは、一昨日の台北丸で到着し、倶楽部に当てられる比嘉盛章氏宅に据え付けられたが、倶楽部の入会申込者は意外に多数にて、中には第</p>	大正15年1月19日	具志川市史新聞集成 大正・昭和戦前編	1993

	徒のために校長の志喜屋氏など	二中学の志喜屋孝信氏も見へるが、設立の上は二中学生を家族としてラヂオを聴かせることになっている。猶、現在市内でラヂオを据え付けているところは西新町の古田、石門通の青山、久米町の今井の諸氏と今度のラヂオ倶楽部等である。			
15	ラヂオ文化から閉出し喰ふ学童蓄音器もない離島の学校	県学務課では、昨年十月一日現在で中小学校に於ける蓄音器並にラヂオ設置校調査を行っていたが、最近纏まったこの調査によれば、某中等学校では蓄音器のない学校は一枚もないが、小学校に於ては県下百四十校の中三十六校が蓄音器を持たず、従って音楽教育に於ける蓄音器の利用を封じられている有様である。郡別にこれを見ると、那覇、首里両市には蓄音器のない小学校は一枚もないが、郡部に於ては島尻六校、中頭五校、国頭七校、宮古八校、八重山十校となつて居り、一体に離島の小学校にないのが多い様である。一方ラヂオ設置に至つては、中等学校二十校の中設置校は僅に七校、小学校は同じく二五校に過ぎず、本県中小学校生徒は先ず電波文化には縁なき衆生と云つた形である。蓄音器のない小学校、並にラヂオ設置校は左の通り。 ▲蓄音器のない小学校〔島尻郡〕渡嘉敷、座間味、仲里、比屋定、粟国、渡名喜、〔中頭郡〕宜野湾、北谷、屋良、天願、伊計、〔国頭郡〕山田、久志、嘉陽、有銘、辺野古、安田、安波、〔宮古郡〕池間、下地、栗間、新里、城辺、西城、伊良部、〔八重山郡〕登野城、川平、大浜、竹富、黒島、波照間、小浜、鳩間、西表、与那国、△ラヂオ設置校〔中等学校〕那覇市：那覇尋常高等、天妃、垣花、首里市：第一、第二、第三、男師附属校、島尻郡：東風平、真壁、佐敷、第一大里、伊是名、南大東、中頭郡：渡慶次、美里、中城、宮城、安田、天底、奥、羽地、屋我地、国頭：宜野座、安和。	昭和13年3月1日	具志川市史新聞集成大正・昭和戦前編、(★北中城村史：2004の記事と同一)	1993
16	暁の鍛錬 天願区赤納 児童のラヂ オ体操	中頭具志川村字赤納・天願区小学児童約三十名は、同校訓導久高将憲氏の指導で、去る五月十七日国民精神総動員健康週間以来、毎朝午前五時起床、字事務所広場でラヂオ体操を元気一杯な号令と共に実行し、心身鍛錬の範を示している。	昭和13年6月21日	具志川市史新聞集成大正・昭和戦前編	1993
17	天願校の記念行事	中頭天願小学校では皇紀二千六百年記念事業として、校歌の制定、校旗の樹立及びラヂオ設置をなし、いよいよ来る十一日紀元の佳節当日式典後、校歌制定と校旗樹立式を執行するが、これと共に奉祝行事として十日から十二日まで三	昭和15年2月4日	具志川市史新聞集成大正・昭和戦前編	1993

		日間、同校で副業品評会を開催、更に県衛生課に依頼して衛生展覧会と映写会を開催、学区民の衛生思想の普及、体位向上に拍車をかけることになった。			
18	【証言】天願尋常高等小学校の皇紀二千六百年記念事業	・・・ラジオは、職員室に設置されていたことは覚えていますが、聞いたことはなかったですね。父兄は学校に集まって聞いたといわれていますがネ。・・・(証言者：天願・島袋綜吉 大正十五生)		具志川市史新聞集成大正・昭和戦前編	1993
19	郷土放送		昭和18年8月18日	嘉手納町史資料編4	1998
20	郷土放送		昭和18年9月16日	嘉手納町史資料編4	1998
21	ラジオ	昭和初期に鉱石ラジオがあったらしいが、性能も現在と比較できないもので、しかも持っている人は極めて少なかったという。喜友名朝昭さんは、台湾にいるおばさんからみやげとしてラジオを貰い、それを聞いて喜んだ記憶があるという。昭和十七年頃、屋根にアンテナを付けてピー・ピー・ピーといじっていたら、軍人が来て叱られたという。(富川盛武)		上勢頭誌	1997
22	沖縄からも選手を派遣 全国ラヂオ 弁論会	二十四日放送されるラヂオ弁論大会九州予選大会へ送る沖縄県代表選手は、県学務課の人選の結果、中頭郡北谷出身の喜友名朝光君に決定。昨年の中学卒業で目下農業に従事し、その弁論は折紙付である。弁論題目は「非常時日本の農村青年に訴ふ」。	昭和10年2月6日	北谷町史	1985
23	第二 ラジ オ・テレビ	ラジオは、小学校の宿直室に設置されていましたが、箱の大きい割には性能が悪く。ピーピーガサガサそて何を言っているか、あまり聞き取れませんでした。調子がいいときには、「こちらは広島放送局です」などと言ってニュースを放送しているのが、はっきり聞こえるときもありました。学校の生徒はそれを聞いて、アナウンサーのアクセントなどのまねしたものです。ラジオを入れてある家庭は一つもなく、情報入手の方法は口コミか新聞に頼っていました。テレビはもちろん見たこともなく、「アメリカではテレビジョンというものが発明されて、ワシントンでおしっこしているのがニューヨークからも見えるそうだ」という話を聞かされて、まさかと不審に思ったぐらいのものでした。		中城村史 通史編	1994
24	ラヂオで標 準語を普及	国語研究会が放送局を要望 言葉を異にする沖縄県では標準語普及の方法が永年識者間に考究され殊に教育会では標準語の徹底に全力を注ぎ「沖縄の教	昭和10年8月29日	宜野湾市史 第6巻 資料編5 新聞集成2	1987

		育振興は国語教育から」と叫ばれているが、県下中小学校国語研究会ではラヂオ放送局の設置により国語統一問題の解決に資すこととなり那覇放送局設置促進に関する陳情書を通信省中央放送局に送ることとなった。		(戦前期)	
25	沖縄にラヂオ商業組合生る	近く店開きする沖縄放送局の初放送を前に県内のラヂオ聴取者はぐんぐん鰻のぼりに増えつつあるが、それに応へて県下のラヂオ屋ではセットの積極的サービスに乗り出すため全県の業者三十余軒を丸にラヂオ商業組合を結成することになり、放送局と県当局が世話役となって準備を急いでいる、こゝで従来釘づけにされていたながら店毎に凹凸のあった修繕料が統一されることになるから、聴取者には頗る便利となる。	昭和17年2月13日	宜野湾市史第6巻資料編5新聞集成2(戦前期)	1987
26	電波に乗る郷土色	沖縄放送局四月中の放送プロ決る待望久しかった沖縄放送局は十九日開局、県民のよるこびを乗せた楽しい四月末までのローカルプロがつぎの通りきまった、同局ではローカル放送に万全を期して県内各方面の代表を網羅した放送資料研究委員会を組織、委員長に早川知事を推してその第一回委員会が十四日午後二時より県正庁で開かれ、まづ三月二十日より四月三十日までの放送番組が決定したのであるが、当日特に各委員から要望された意見は本県においては、まづラヂオの普及が何よりの問題であるから積極的に働きかける、ラヂオ普及協議会の設置、県政振興に協力するため県当局の県政発表の時間設置、必勝下に相応しい郷土自慢や郷土殊勲勇士の紹介、毎月月末に来月の新生活運動の目標と具体的解説ローカル演芸放送はあまりそれに偏しないこと。などで、更に講演放送は知名士だけを揃へず澁刺たる若い青年層も大いに活用されたいと強調された。四月の単独放送番組・・・(中略)・・・【音楽、演芸】(午後のニュースにひきつづき二〇分乃至二五分間)詩吟、合唱、ラッパ鼓隊中学校生徒、△吹奏楽女学校生徒、△勤労者の音楽、△箏曲、△郷土古典音楽、△離島民謡めぐり、△放送劇“護佐丸”石川文一作、△愛国詩または短歌朗誦沖縄歌人協会【講演または音楽】(後六時五〇分より六時五九分)・・・(以下省略)・・・	昭和17年3月26日	宜野湾市史第6巻資料編5新聞集成2(戦前期)	1987
27	試験放送	沖縄放送局では本十九日より試験放送を左の如く行ふ △午前十一時四十五分ラヂオ体操引き続き時報、報道、△午後一時療養所向け放送、△二時四十五	昭和20年1月19日	宜野湾市史第6巻資料編5新聞集成2	1987

		分ラジオ体操、△三時、五時なほ受信に当りてはダイヤル目盛を従来のより十五度位左（目盛の少ない方）に廻して聴取出来る。		(戦前期)	
28	ラジオの申込/郵便局で交付/聴取の許可料も全免	十一月一日より放送用施設無線電話■ ■改正に伴って各郵便局でラジオ申込受付事業開始せられ尚聴取施設許可料も一円から五十銭に低減せられ然も放送協会が負担することになっているから申込者は実質的には許可料全免となつたので施設者も次第に増加し各郵便局及取次所では相当に繁忙を極めている。模様である右に就き■■那覇電報電話課長は語る。「何分御当地は地理的關係もあつて普及状態も幾分見劣りがしますが近く■送■も表現の運びとなつて居りますのでその暁は申込者の殺到も予想せられ其の筋でも大いに期待をかけて居られる模様です。此度規則の改正された要点は左の通りです」 一、聴取者の負担軽減を計る為許可料を実質的に全免せられたこと 一、出願手続の簡易化を図りたること 一、聴取施設者の名義変更は相続又は法人合併其の他包括的継承に因る場合に限定し且之を再出願したること 一、右事項に関連し不法施設嚴重に取締ることとなりたること。	昭和14年11月26日	西原町史 西原の文献 資料 資料編 第 2巻	1984
29	放送局開局の喜び	文化の花形放送局の店開き、電波にのつて文化の潮はひたひたと南島農村の隅々にも押しよせてくる孤島沖縄の世紀の躍進を約束して…以下は南島知名士の語る開局の喜び 丹羽社会教育課長：待望の放送局が・・・(以下省略)・・・。当間那覇市長：全県民がそれこそ首を長くして待ちに待った放送局は・・・(以下省略)・・・。伊豆味首里市長：六十万県民待望の沖縄放送局が数年の年月を要して・・・(以下省略)・・・。大政翼賛会支部・庶務部長尚謙氏：沖縄放送局がこのたび開局されたのは時局下意義があることで喜んでいる・・・(以下省略)・・・。	昭和17年3月26日	西原町史 西原の文献 資料 資料編 第 2巻	1984
30	一、戦前の兼城生徒会	昭和十六年の国民学校になってからは、軍国主義による兵学一体の皇民少年教育、あるいは小国民養成の一辺倒となり、勉強よりも生活の鍛錬教育に変わっていった。兼城生徒会の子供たちは、日曜日、夏休み、冬休みなどは、朝起会といって夜明け前に村屋に集合し、「ワッショイ、駆け足」「キチク、バイヘイ行進」のかけ声で東西に中道、前道を回った。その後、村屋にあった桜の木の下で、字担任の指揮で天突き運動、ラジオ体操を行ない体と心を鍛えた。・・・(以下省略)。	昭和16年頃	兼城誌	2006

31	創立五十周年記念事業予算	【三、各教科設備補充】5.ラヂオ100,000円 ラヂオ新設費【ラヂオについて】五十周年記念事業の計画の中にラヂオ購入がおりこまれていた。案外早く実現されて職員児童共に喜びあった児童教育上是非供へねばならぬものだ痛感していたが五十周年を機会にここに凱歌があがった。本県の如く地理的に恵まれぬところではラヂオを通しての教育が如何に必要であるか。十四、五年前迄はラヂオは極めて幼稚のものだった。それすら物珍しいものと考えた時代もあったが、これに比較し僅かの年数でしかも今日の如き発達をしたのは近代科学の偉力に今更ながら驚く。人間が自然を征服する時代が今に来るだろう。ラヂオを通し日常生活に必須な知識を修得せしめ、文化の伝達拡充に今一度の光彩をはなつ機会をとともに喜ぶ。(瀬底)	昭和12年	首里第二尋常高等小学校創立五十周年記念誌	1937
32	会報に見る発足当時の活動	【ラジオで登校合図】六月三日から毎朝七時十五分から五分間親子ラジオを通じて、君が代行進曲と敷島行進曲を放送し、登校の合図にしている。以後遅刻生が非常に少なくなつて朝の自習も進んでやるようになり、学校の先生方や父兄から喜ばれている。		佐敷小学校創立百二十周年記念誌・やればできる	2003